

ラワ語ボールワン方言の基本体系

三 谷 恭 之

Descriptive Study of the Lawa Language (Bo Luang Dialect)

by

Yasuyuki MITANI

はじめに

ラワ語は系統的には北部モン・クメール系に属する言語である。この言語の話し手は、かつては北部タイの平野部に広く分布していたといわれるが、現在ではチェンマイ県 (C. Chiang-mai) およびメーホンソン県 (C. Mae Hongson) の山岳地帯にしか居住していない。その最も主要な居住地は、チェンマイ市の南西約 150km のボールワン (Bo Luang) およびその北西約 50km のウンパイ (Umphai) の一帯である。

本稿は、私が1964年9月から1965年4月の間に北部タイで行なった現地調査の結果¹⁾もとづいて、このラワ語ボールワン方言の基本体系を簡略に記述しようとするものである。より整った記述的研究は、他の方言やカメート語・カム語などとともに、英文の最終報告において発表する予定である。

1. 音素体系

1.1. 音節の構成

ラワ語の音節を構成要素に分解してみると、次のように2つのタイプに分けることができる。

{ 自立音節……C(C)V(V)(S)(C)
{ 附属音節……CV

ここで、Cは子音音素、Vは母音音素、Sは半母音音素をそれぞれ代表しており、()は存欠いづれでもよいことを表わしている。

これからも明らかなように、ラワ語にはトネームやレジスターの音素論的対立がなく²⁾、また附属音節の構成は単純である。そのため、自立音節の子音音素や母音音素の種類が多く、ま

(1) これについては、拙稿「ラワ語の現地調査」『東南アジア研究』III-1, pp. 150~153 参照。

(2) トーンについては2.3.(3) 参照。

た末尾成分 -VSC とした他の言語にはあまり見られないような形式が存在する。³⁾

次に、おのおのの構成要素について、各音素の音声学的性格と結合関係の制約等を自立音節の初頭子音音素から順に記述する。

1.2. 初頭子音音素

ボールワン方言における自立音節の初頭子音音素 C- は次の表の通りである。

	閉鎖音				鼻音			摩擦音・流音	
	I	II	III	IV	II	III	IV	III	IV
唇音	p	?b	ph	mb	?m	hm	m	f	v
歯茎音	t	?d	th	nd	?n	hn	n	hl, s	r, l
硬口蓋音	c	?j	(ch)	ñj		hñ	ñ		j
軟口蓋音	k		kh	ŋg	?ŋ	hŋ	ŋ		
声門音		ʔ							h

この表では、調音位置をタテに並べてあるが、上から唇音（両唇音または唇歯音）、歯茎音、硬口蓋音、軟口蓋音、声門音の5つの系列が認められる。これは特に珍しいことではない。しかし、ヨコの調音様式または弁別の特徴による系列はかなり特殊である。まず、閉鎖音、鼻音、摩擦音・流音の3つの系列にわかれ、そのおのおのについて、I～IVの4つの系列が認められる。⁴⁾

系列Iは閉鎖音にしかない無声無気音の系列であるが、系列IIは閉鎖音と鼻音の両方にみられ、硬い声立てあるいは入りわたりで声門閉鎖を伴った有声音という点でI、III、IVと対立している。無声化した鼻音および摩擦音・流音は気音（h音）性があるものとして無声出気閉鎖音とともに系列IIIとした。系列IVはIIに対して軟かい声立ての有声音であるがここで閉鎖音の系列は入りわたりが鼻音である。

(1) /p t c k/

この系列の音素に該当する単音は、無声無気の閉鎖音および破擦音 [p t tɕ k] である。⁵⁾

e. g. «4» paʊŋ [paʊŋ] «手» taiʔ [tæiʔ] «灰» caʔ [tɕaʔ] «頭» kaiñ [kæiñ]

(2) /?b ?d ?j ?/

(3) モン・クメル諸語にはこのような形式がさらに見出される可能性は十分にあると思う。たとえば、中部ベトナムのパコ (Pacoh) 語の末尾成分 [-wʔ] [-jʔ] は /b/ [ʔb-] /j/ [ʔj-] の allophone されているが、[-wʔ]、[-jʔ] とみなすこともできると思う。cf. R. Watson, "Pacoh Phonemes", *Mon-Khmer Studies I*, ed. David D. Thomas (Saigon: 1964), pp. 140f.

(4) これに類似した系列化は、かつてはタイ諸語にも存在したと思われるが（ただしIIとIVの対立は声門化音対単なる有声音である）、現在ではそれがトネームの増加とひきかえに単純化してしまっている。cf. A-G. Haudricourt, "Bipartition et tripartition dans les systèmes de tons", *BSLP* (1961), 163~80.

(5) 以下、[] の音声記号は必要な場合のみ精密記号を用い、他は適宜に簡略化する。

/ʔb, ʔd/ は前声門化有声閉鎖音 [ʔb] [ʔd] または内破音 [ʔβ] [ʔd] である。/ʔj/ は同様に [ʔdz] または [ʔdʒ] が基本的であるが異音として弱い摩擦を伴った [ʔj] が観察される。/ʔ/ は声門閉鎖音 [ʔ] である。e.g. 《建てる》 ʔboh [ʔbo:h]~[ʔβ-] 《指》 ʔdɔih [ʔdɔ:ɛh]~[ʔd-] 《村》 ʔjuan [ʔdzu:an]~[ʔdʒ-]~[ʔj-] 《取る》 ʔeah [ʔi:æh]

(3) /ph th (ch) kh/

それぞれ無声出気の閉鎖音または破擦音 [p' t' tɕ' k'] が該当する単音である。ただし /ch/ は基本的にはポールワン方言では「あきま」になっており、人名などに現れるのみでそれも /th/ と自由交替する⁶⁾。e.g. 《(食器など) 洗う》 phak [p'a:k] 《吐く》 thɔuk [t'ɔ:mk] 《人名》 chai [tɕ'a:i]~thai [t'a:i] (タイ語/chaaj/) 《木》 khɔuʔ [k'v:uʔ]

(4) /mb nd ŋj ŋg/

附属音節が先行しない自立音節の初頭子音としては、一般に前鼻音化有声閉鎖音 [mb nd n̄dz ŋg] である。ただしこの位置では /ŋj/ をもった形態素は私の調査の範囲には見られなかった。eg. 《忘れる》 mbia [mbi:a] 《降りる》 ndɔuh [ndɔ:uh] 《背なか》 ŋgɔ [ŋgɔ:]

しかし、先行する自立音節の末尾が鼻音 /-m -n -ŋ -ŋj/ であるときは入りわたりの鼻音は特に観察されない。eg. 《こども》 kuan-ndɔuʔ [kuandɔ:uʔ] 《チョウチョウ》 mbuŋ-mbaŋ [mbuŋba:ŋ]

附属音節が先行する場合は、同じ調音位置の鼻音プラス有声閉鎖音 [mb nd n̄dz ŋg] であって、音声学的には [CVN|C-] のように鼻音部は附属音節の側に属する。いま、この鼻音部を音素論的には自立音節の初頭子音の側に属すると解釈した根拠は、仮に鼻音部を附属音節に属する音素Nとした場合に附属音節 CVN- または N- との結合においてしか現れない音素 /bdjg/ を設定しなければならないからである⁷⁾。eg. 《口》 ʔəmbɔm [ʔambɔ:m] 《てのひら》 ʔənduak [ʔandɔ:ak] 《木製の碗》 ʔəŋjaup [ʔəndʒa:ʔp] 《塩からい》 səŋgih [səŋgi:h]

(5) /ʔm ʔn ʔŋj/

この系列の音素には、前声門化有声鼻音 [ʔm ʔn ʔŋj] が該当する。この方言には /ʔŋj/ は存在しない。e.g. 《焼畑》 ʔma [ʔmæ:] 《帽子》 ʔnaiʔ [ʔnæ:iʔ] 《20》 ʔŋa [ʔŋæ:]

(6) /hm hn hñ hŋj/

これは入りわたりが無声音である鼻音 [ʰm ʰn ʰŋj] である。一般に無声音の部分とはたとえばウンパイ方言のそれにくらべて強くない⁸⁾。eg. 《巢》 ʔəhmaum [ʔaʰmæ:ʰm] 《血》

(6) もともとの *ch- も /th-/ となっている。eg. 《売る》ポールワン thouʔ : ウンパイ choʔ <*ch-

(7) 実際、たとえば /ʔəmbɔm/ を故意にゆっくりと発音させると、私のインフォーマントは /ʔə-mbɔm/ のように切って発音した。

(8) しかし、《山》mɔ : 《医者》hmɔ といった対立は存在し、かつてウンパイ方言の hm, hn, hl などがポールワン方言ではすべて m, n, l などになっていると報告されたのは誤りである。cf. Sanidh Rangsit, "Beitrag zur Kenntnis der Lawasprachen von Nord-Siam", *Anthropos*, 37-40 (1942~5), pp. 688~710.

hnam [ʰnã:m] <<つまむ>> hñip [ʰñi:p] <<あくびする>> hɲap [ʰɲã:p]

(7) /m n ñ ɲ/

これは単なる有声鼻音 [m n ñ ɲ] であるが、(5)(6) に対立して入りわたりが軟かく [ᵐm ᵑn ᵑñ ᵑɲ] と表わすことができる。eg. <<バナナ>> ʔəmɔih [ʔamɔːh] <<種>> nɔŋ [nɔːŋ] <<針>> ñeʔ [ñeːʔ] <<太陽>> səŋaiʔ [səŋã:iʔ]

(8) /f s h ; hl/

/f s h/ には無声摩擦音 [f s h] が該当し、/hl/ には入りわたりが無声音の流音 [l] が該当する。f : v=hl : l の比例関係が成り立つから /f/ を /hv/ で表わしてもよいが、実際には /v/ よりも摩擦が強い。eg. <<暗い>> fiak [fiːak] <<食事する>> sɔum [sɔːum] <<ハチ>> he [hē:] <<雨>> hlaiʔ [l̥aiːʔ]

(9) /v j ; l r/

/v j/ は無摩擦または弱い摩擦を伴った [v~ʋ] [j] であり、/l r/ は側面音 [l] およびふるえ音 [r] である。なお、タイ系借用語では [w] も観察されるが、[ʋ, v] と自由交替するのでこれも /v/ としておく。また(10)参照。eg. <<ナイフ>> vik [viːk]~[ʋ-] <<泣く>> juam [juam] <<6>> lɛh [lɛːh] <<ハエ>> roi [roːei] <<泳ぐ>> vai [waiː]~[va:i] <タイ語 /wáaj/

(10) 初頭子音結合

初頭子音結合の第1成分には /p ph mb ; k kh ŋg/ が立ち、第2成分には /l r ; v/ が立つが、実際の結合は次のものしかない。

pl	—	kl	—	kv
—	phr	—	chr	
mbl	mbr	ŋgl	ŋgr	

結合における各音素の音声学的性格は一般に以上に記述してきたものと同じであるが、/r/ は /ph kh/ の後では無声化して [r̥] または [ɹ̥] となることがある。また /v/ は摩擦を伴わず [ʋ] または [w] である。eg. <<果実>> plɔiʔ [plɔːiʔ] <<毛布>> phruʔ [pˈruːʔ]~[pˈr̥-]~[pˈɹ̥-] <<コウモリ>> mblak [ᵐblak] <<鉛>> mbrak [ᵐbraːk] <<なめる>> kluak [kluːak] <<水牛>> khvak [kˈraːk]~[kˈr̥-]~[kˈɹ̥-] <<トカゲ>> səŋgla [səŋglaː] <<床下>> ŋgraum [ŋgraːm] <<手を振る>> kvak [kvaːk]

1.3. 母音音素

自立音節の -V(V)- の位置に立つ母音音素およびその結合は、ポールワン方言ではいささか不均整な体系を示している。

ラフ語には /a : aa/ といった母音の長短による対立はない。したがって母音の長さはそれ自体では音素論的な価値をもっていない。ポールワン方言では、その発音くせとして、一般に

単語を単独で発音するとき、文末の単語、文中の強調された単語などは自立音節の母音が相当に長く発音される。その長さは一定していないが、母音で終る音節において最も長い。/-ʔ/ や /-h/ に終る音節でも長母音が現れることがあり、しばしば聞きとりにくいことがあった。本稿では単独で発音するときの母音の長めを [ː] および [ˑ] で表わしておいた。

i	u	u	ia	ua	ua
e	(ɣ)	o	ea		oa
ɛ~ɜ		ɒ			
	a				

(1) /i u u/

それぞれ、張唇前舌、張唇後舌、円唇後舌の狭母音 [i] [u] [u] が該当する。eg. <白い> piŋ [pi:ŋ] <縫う> cuŋ [tɕu:ŋ] <厚い> pu [pu:]

(2) /e (ɣ) o/

それぞれ、張唇前舌、張唇後舌、円唇後舌の半狭母音 [e] [ɣ] [o] が基本的であるが、/e o/ は /-ʔ/ の前ではやや二重母音化して [ei] [ou] となることがある。また /ɣ/ は若干のタイ系借用語に現れるのみである。eg. <1>teʔ [te:ʔ]~[teiʔ] <乳> neŋ [ne:ŋ] <たくさん> soh [so:h] <空色> nam-ŋɣn [namŋɣ:n] <タイ語/nám-ŋɣn/

(3) /ɛ, ɜ/

/ɛ/ は、初頭子音 /ʔ, h/ および鼻音の後では、鼻母音化した張唇前舌半狭母音 [ẽ] であり、その他の環境では鼻母音化しない半広母音 [ɛ] である。eg. <くびき> ʔɛk [ʔẽ:k] <唾液> ʔmɛ [ʔmẽ:] <マンゴー> pɛ [pɛ:]

/ɜ/ は常に張唇中舌半広母音 [ɜ] または /ɛ/ よりやや後寄りの [ɛ̠] であって、環境によって鼻母音化や狭母音化することはない。eg. <へび> səʔɜuŋ [saʔɜ:uŋ] <竹筒> mɜiŋ [mɜ:iŋ]~[mɛ:iŋ]

なお、この2つの音素は、/ɛ/ が半母音音素 S の前には立たず、/ɜ/ は S の前にしか現れないという相補的分布を示していて、当然これらを同一音素の allophone と考えたいのであるが、/ɛ/ が /a/ や /ea/ と同様に /ʔ, h/ および鼻音の後という環境で鼻音化、狭母音化するのに対し、/ɜ/ はそのようなことがないので、これらと異なった音素と解釈することにした。⁹⁾ eg. <行く> hɜu [hɜ:u] <ハチ> hɛ [hẽ:] <わな> heauʔ [hĩ:ãuʔ] <浴びる> haum [hã:uːm]

(4) /ɔ, ɒ/

(9) もちろん、この2つを同一音素 /ɛ/ と解釈して、/a, ea, ɛ/ のうち /ɛ/ のみは半母音音素 S の前では鼻音化・狭母音化しないという条件を加えればよいわけであるが、あまりに機械的な解釈であるので採らなかった。

/ɔ/ は、円唇後舌の半広またはそれよりやや狭い [ɔ]~[ɔ̃] である。/? , h/ および鼻音の後では鼻母音化するが、/ɛ, a, ea/ の場合ほど顕著ではない。eg. <川> klon [klob:ŋ]~[klɔ̃:ŋ] <出る> ?ɔk [ʔɔ̃:k]

/ɒ/ は、/ɔ/ よりも少し広くかつ唇の丸めの少ない非円唇後舌半広母音 [ɒ] である。が [ʌ] のように張唇ではない。ふつう音声記号 [ɒ] は円唇後舌広母音つまり [ɔ] と [a] の中間音を表わすが、ここではこの音素を代表することにした。この音素も /? , h/ および鼻音の後では鼻母音化するがさほど顕著ではない。ex. <中> touʔ [tɔ̃'uʔ] <火> ŋɒ [ŋɔ̃:]

なお、念のため /o ɔ ɒ/ の対立例を示しておく。eg. <タケノコ> pon [po:ŋ] <はしご> pɔŋ [pɔ̃:ŋ] <窓> pɒŋ [pɒ̃:ŋ]

(5) /a/

まず、初頭子音が /? , h/ または鼻音のときは著しく鼻母音化された張唇前舌の半広母音 [ã] である。とくに母音で終る音節の中および半母音 /i/ の前ではさらに狭い [ɛ̃] も観察される。eg. <めし> ?aup [ʔã·ʌp] <顔> na [nã:]~[nɛ̃:] <太陽> səŋaiʔ [səŋã·iʔ]~[-ɛ̃·iʔ] ただし、初頭子音が /?/ であっても附属音節 /lə-/ が先行するときは鼻母音化されずに [a] または [æ] と発音されるのがふつうである。この点さらに検討を要するようと思われる。eg. <水> laʔaum [ləʔa·ʌm]~[ləʔæ·ʌm].

初頭子音が軟口蓋および硬口蓋の閉鎖音であるとき、および -VSC 型の音節において半母音 S が /i/ であるときは、張唇前舌の(半)広母音 [æ] が観察される。eg. <魚> kaʔ [kæ:ʔ] <8> sətaiʔ [sətæ·iʔ]

その他の環境では、[a] から [a] にいたる範囲の広母音である。eg. <盗む> mbraʔ [mbrɑ:ʔ]~[mbrɑ̃:ʔ] <茶> sa [sa:]~[sã:]

(6) /ia, ua, ua/

これらはすべて漸弱型の二重母音 [i·a] [u·a] [u·a] である。eg. <青年> piplia [-pli·a] <笑う> ŋwah [ŋw·ah] <欲する> kuat [ku·at]

(7) /ea, oa/

/ea/ は、/? , h/ および鼻音の後では著しく鼻母音化、狭母音化して [i·ã] となる。/ea:/ /ia/ の対立はときには鼻音性の有無の対立と思われることさえある。eg. <取る> ?eah [ʔi·ãh] (cf. <遊びに行く> ?ia [ʔi·a]) <見る> nean [nī·ãn]

その他の環境では /ea/ はやや三重母音的な [eia] である。eg. <酒> plea [pleia·] /oa/ は一般に [o·a] であって、/? , h/ および鼻音の後では僅かに鼻母音が観察される。eg. <寒い> koat [ko·at] <くしゃみする> ?moak [ʔmō·ak]

1.4. 半母音音素

半母音音素には /i u u/ の3つしかない。これらは音声的には母音である。

(1) /i/

これは、/-c, -ñ/の前ではわたりの狭母音 [i] である。eg. <織る> taiñ [ta'iñ] <鉄> hlɛic [hlɛ'itɕ]

/-ʔ, -h/の前および末尾子音をもたない音節では、主核母音が /o, ɔ/ のときやや狭い半狭母音 [e] または [ei], その他のとき狭母音 [i] である。eg. <選ぶ> rɔih [rɔ'eh] <はえ> roi [ro:e]~[ro'ei] <きいろい> səŋzi [səŋzi]

(2) /u/

/-k, -ŋ/の前ではわたりの [u], /-ʔ, -h/の前および末尾子音をもたない音節では [u] である。eg. <国> məuŋ [mə'uŋ] <ぬぐ> pauk [pa'uk] <亀> rauh [ra:uh] <まっすぐな> sɜu [sɜ:u]

(3) /u/

これも同様に、/-p, -m/の前ではわたりの [u], /-ʔ, -h/の前および末尾子音をもたない音節では [u] である。eg. <肝臓> tɔum [tɔ:'um] <牛> məup [mə'up] <肉> tɔu? [tɔ:u?] <あぶら> lauh [la:uh]

半母音音素と母音音素とは自由に結合できるとは限らない。次に可能な -V(V)(S)- を表にしておこう。

a	ɛ	e	ɒ	ɔ	o	i	u	u	ea	oa	ia	ua	ua
ai	zi			ɔi	oi		ui	ui		oai			
au	ɜu												
au	ɜu			ɒu (ɔu)		iu			eau				

このうち、ɔu は <玉ねぎ> hɔum が1例あるのみである。

半母音音素と末尾子音音素との結合も制約があって、この場合はいっそう体系的である。可能な -(S)(C) は次の通りである。

(-#)	-ʔ	-h	-k	-ŋ		-t	-n	-p	-m
-i	-iʔ	-ih			-ic	-iñ			
-u	-uʔ	-uh	-uk	-uŋ					
-u	-uʔ	-uh						-up	-um

この表からわかるように、/-ic, -iñ/には分布のうえで問題がある。まず、[itɕ] [iñ] を /-c, -ñ/ とする解釈もできるし、これを /-it, -in/ または /-ik, -iŋ/ とする解釈もできる。しかし、第一の解釈は /-uk, -up/ などとの均衡上、また第二の解釈は主核母音の /i/ プラス /-t, -n ; -k, -ŋ/ が存在するのにこれらは [tɕ] [iñ] とならないこと、のためにどちら

も採らなかった。

1.5. 末尾子音音素

末尾子音-Cは次の10個である。

-ʔ -k -c -t -p
 -n̄ -ñ -n -m
 -h

(1) /-ʔ -k -c -t -p/

これらは破裂を全く伴わないか弱い破裂を伴う閉鎖音および破擦音 [ʔ^o] [k^o] [tʃ^o] [t^o] [p^o] である。/c/ は半母音 /i/ の後にしか現われない。e.g. <<サル>> fuaʔ [fu·aʔ^o] <<乗る>> pok [po:k^o] <<美しい>> maic [mæ·tʃ^o] <<寺>> vuat [vu·at^o] <<ノミ>> teap [te·ap^o]

(2) /n̄ ñ n m/

初頭子音の場合と同じく有声鼻音 [n̄] [n̄^o] [n] [m] である。/ñ/ は半母音音素 /i/ の後にしか現われない。e.g. <<立っている>> con̄ [tʃo:n̄] <<生きている>> ʔaiñ [ʔæ·ñ^o] <<踊る>> foan [fo·an] <<書く>> team [te·am]

(3) /h/

無声の声門摩擦音 [h] が該当する単音である。e.g. <<鼻>> mauh [mæ·uuh] <<炭>> səih [sə·ɛh] なお /-ʃ/ : /-ʔ/ : /-h/ の対立例をあげておく。e.g. <<つば>> mɔ-ka [-kæ:] : <<魚>> kaʔ [kæ·ʔ] : <<くし>> səkah [-kæ·h], <<薬>> ʔjura [ʔdzura] : <<～の(所有)>> juaʔ [ju·aʔ] : <<100>> ʔəjura [ʔju·ah]

1.6. 附属音節

ラワ語の附属音節は CV 型のみであって、CCV や CVC はない¹⁰⁾。附属音節は自立音節の直前（または稀れに他の附属音節の直前）にしか立たず、通例強勢をもたず母音が長められることもない。その母音音素も基本的には /ə/ のみである。

/ə/ は、はっきりと発音すると [a] であるが、ふつう弱く発音されて中間母音 [ə] となる。また自立音節の母音音素 /a/ と異なって /ʔ/ や /m/ のあとでも鼻母音化することなく [ə]~[a] である。e.g. <<粉>> ʔəlian [ʔə-]~[ʔa-] <<朝>> məsaʔ [mə-]~[ma-]

cf. <<7>> ʔələh [ʔæ:-] <<母>> maʔ [mæ·ʔ]

最もしばしば用いられる附属音節は /sə-, ʔə-, lə-/ である。このうち /lə-/ は後続の自立音節の初頭子音が /ʔ/ の場合が圧倒的に多くその他の子音の場合は少ない。e.g. <<太陽>>

(10) この点で、クメル語やクム語などよりもモン語に類似している。現代モン語の附属音節も CV 型のみであって、その母音も /ə/ に限られている。cf. H. L. Shorto, *A Dictionary of Modern Spoken Mon* (London : 1962), pp. x~xi.

səŋnai? [sə-] <治す> səphrai? [sə-] <夢をみる> ʔəmbu? [ʔə-] <てのひら> ʔənduak [ʔə-]; <水> ləʔaum [lə-] <遊ぶ> ləha? [lə-]

そのほか /kə-, pə-, mə-/ などがある。<上> kəroa [kə-] <絹> pəlbup [pə-]
<ポメロ> məʔo [mə-]

母音が /ə/ 以外のものでは /pi-/ [pi-] がある。eg. <商人> pithou? [pi-] <少女> pikhrəih [pi-]

また、次の例における /ku-, su-/ も附属音節と考えることができる。eg. <ここ> kurzi [ku-] <すみません> suma mai? [su-]

2. 文法体系

2.1. 単語の構成

ラワ語の単語をその構成によって分類すると概略つぎの3種類が認められる。

(1) 単純単語…1つの自立形態素からなるもの。その形は、i) 1つの自立音節からなるものと、ii) 附属音節プラス自立音節からなるものの2種類がある。eg. i) <飲む> ʔə? <私> ʔai? <20> ʔna ii) <9> sətaiŋ <借りる> ʔəma?

(2) 複合語…附属形態素プラス自立形態素からなるもの。その形は、大部分が、i) 1つの附属音節と自立音節からなるが、若干 ii) 2つの附属音節と自立音節からなるものがある。e.g. i) <左側> kəve? (= {kə-} + {ve?}), <夜> məsaum (= {mə-} + {saum}) ii) <女の人> piʔəpəuŋ (= {pi-} + {ʔəpəuŋ}), <昼ま> məsəʔnai? (= {mə-} + {səʔnai?})

(3) 合成語…2つ以上の自立形態素からなるもの。実際には2つの自立形態素からなるものがふつうで、その形も2つの自立音節からなる場合が多い。e.g. <はきもの> hak-cuaŋ (= <皮> hak + <あし> cuaŋ) <松の木> khəuʔ-ŋgzi? (= <木> khəuʔ + <松> ŋgzi?)
もっとも、多くの言語と同様に、修飾関係で結ばれた内心構造の句と合成語との区別はあいまいである。e.g. <湯> ləʔaum kauk (= <水> プラス <熱い>)

複合語の第1成分となる附属形態素は予期に反して決して多くはない。もちろん、附属音節の多くはかつては何らかの機能をもった附属形態素であった可能性は考えられるが、現在ではそのほとんどが1つの自立形態素の形の一部であるにすぎない。<混ぜる> ʔəʔmea (= {ʔə-} + <～と共に> ʔmea) における {ʔə-} のように他に並行例がないためにその機能の明らかでないものを除けば、機能の明らかな附属形態素は次のものに限られている。

{kə-}…場所・方向を表わす。e.g. <中側> kənai (nai <中の> <タイ語>), <右側> kətom (tom <右の>) <南> kəsai¹¹⁾h

(11) <北> kəʔdoan <南> kəsai¹¹⁾h などの -sai¹¹⁾h, -ʔdoan はいわゆる unique element である。

{mə-}…時を表わす。e.g. <朝> məsa? (sa? <早い>), məsə?ŋai? <昼ま> (sə?ŋai? <おそい>) なお、この mə- は <～の時に> muua の短縮形と思われる。

{pi-}…「もの(者・物)」を表わす。e.g. pithou? <商人> (thou? <売る>) pi?dɔŋ <つけもの> (ʔdɔŋ <つける>), なお、この pi- は pui <人> の短縮形である。

形態素 {pi-} は、また次の例のように関係代名詞的に用いられることがある。このときも人または物を表わす。

e.g. mah pen pi- kuat ʔeah ʔuŋ (である・誰・pi-・したい・とる・それ) それをほしいのは誰ですか。

mah mam pi- kuat ʔeah pa? (である・何・pi-・したい・とる・君) 君がほしいのは何ですか。

しかしこの場合、音韻形式としては /#pikuat#/ であっても、文法形式としては {#pi # kuat ʔeah ʔuŋ#} あるいは {# pi # kuat ʔeah pa? #} であるので、この {pi-} を接頭辞とすることはできない。(なお 2. 2. (1) ii) 参照)

2.2. 形式類 S 一名詞類および名詞句

形式類 S は、基本的には文の主語の位置に立つ形式として定義されるが、そのほか他動表現の目的語、前置詞付加の構造、それ自身より大きい名詞句の直接成分などの位置にも立つことができる。

e.g. [主語] /mu thɔ ləʔa/ hlak poʔ-te? (人びと・あの・2・愛する・互いに) あの二人は愛しあっている; mah mam /hɜi/ (である・何・これ) これは何ですか; [目的語] sɔp tɜuh /ʔuŋ/ (好む・ない・それ) それはきらいだ; kai ʔdaŋ/ʔəjuah ʔmat/ (ある・まだ・100・パーツ) まだ100パーツある; [前置詞付加] sam kwah hɜi laʔ /paʔ/ (しよう・与える・これ・～に・君) これをお前にやろう; maiʔ ʔziŋ maʔ nɜum /kənom/ (あなた・来る・あなた・～から・どこ) あなたはどこから来たのですか; [名詞句における修飾語] pui /hɜi/ (人・これ) この人; sat liaŋ /ʔjuaŋ ləvuuaʔ/ (動物・飼う・村・ラワ族) ラワ族の村の家畜; etc.

この形式類 S に属する単語としては、名詞、人称代名詞、指示詞、数詞などであるが、このうち数詞は他のグループとは異なって形式類 V を修飾することができる。

(1) 名詞および名詞句

i) 名 詞

このグループに属する単語はきわめて多い。e.g. kaiŋ 頭, raic 草, khɜuŋ ことば, səŋaiʔ 日, ləvuuaʔ ラワ族, vuuat 時, etc.

これらは上述の形式類 S の職能をすべてもっている。しかし、場所および時を表わす名詞

(および名詞句)はそのほかに前置詞などを介さないでも動詞・動詞句を限定修飾することができる。

e.g. *ʔaiʔ kwi hɜu (nuŋ) /vianʔ/* (私・経験がある・行く・(～に)・町) 私はチェンマイに行ったことがある; *ʔaiʔ ʔaiŋ ʔauk /kurzi/ ʔi ʔdɜiŋ* (私・来る・住む・ここ・すでに・ながい) 私はここにながいがい間住んでいる; *sam juh kan /ləʔaih/* (しよう・する・仕事・きょう) きょうは仕事をしよう; *səʔzih* あす; *kəʔzuh* きのう; etc. (なお, *kurzi* 等については指示詞参照)

また、後述のように意味上計量の可能な名詞はたいてい後続の数詞・数詞句によって限定修飾されるが、一部の名詞は先行する数詞と結合して数詞句を構成することがある(単位詞)。

e.g. *tiʔ/səŋaiʔ/* 1日; *ləʔa /pui/* 2人; *ləʔoi /ʔbɜu/* 3個; *paunʔ /ʔmat/* 4パーツ; etc.

しかしこの単位詞は他の言語の類別詞のように多くは用いられず、とくに名詞が指示詞によって限定されるときは原則として用いない。

e.g. *pɛ hɜi* このマンゴー (*pɛ ʔbɜu hɜi* とはいわない); *ʔɛ ləʔa* 2羽のにわとり (*ʔɛ tua ləʔa* とはいわない); etc. (なお, 数詞・指示詞参照)。

ii) 名 詞 句

最も代表的な名詞句は、名詞を内心構造のヘッドとする限定修飾関係の句である。その構造は、被修飾語(名詞) + 修飾語である。修飾語の位置には、名詞・人称代名詞・指示詞・数詞などが直接にまたは前置詞を先行して立つほか動詞も立つ。

e.g. [名詞] */kuan soʔ/* 犬の子; */ʔəvia nuŋ piʔdoak/* (とら・～における・森) 森のとら; [人称代名詞] *kuat hɜu nuŋ /ŋuaʔ (juaʔ) teʔ/* (したい・行く・～に・家・～の・自分) (自分の) 家に帰りたい; [指示詞] */caup hɜi/* この帽子; [数詞] */tuənʔ ləʔoi/* 3羽のアヒル; [動詞] */pui thouʔ khua/* (人・売る・もの) もの売り; */sat lianʔ/* (動物・飼う) 家畜; etc.

形態素 *pi-* が関係代名詞的に用いられることについては前にもふれたが、この *pi-* に導かれる句も名詞句である。まず、*pi-* + 動詞句において、動詞句が目的語をもたない他動詞句であるとき *pi-* が意味上の目的語となる。

e.g. *mah mam /pi- sam ti paʔ/* (である・何・もの・しよう・買う・君) 君が買おうとするものは何か (=君は何を買うか); *ʔaiʔ jonʔ tɜuh /pi- ʔah keʔ/* (私・わかる・ない・こと・言う・彼) 私は彼のいうことがわからない。

動詞句が自動詞句または目的語をもつ他動詞句の場合は *pi-* が意味上の主語となる。

e.g. *paiʔ jonʔ paʔ /pi- hɜu kuro/ ʔa* (君・知る・君・ひと・行く・あそこ・～か) 君はあそこを歩いているひとを知っているか; *mah pen /pi- sam ti ʔunʔ/* (である・誰・ひと・

しょう・買う・それ) それを買う人は誰ですか；

さらに、pi- は所有を表わす前置詞 juaʔ が導く句とも結合して名詞句を構成することができる。

e.g. hzi mah /pi- juaʔ pen/ (これ・である・もの・～の・誰) これは誰のですか；/pi- juaʔ ʔaiʔ/ səkhraʔ, /pi- juaʔ maiʔ/ səŋa 私のは赤色で、あなたのは緑色だ。

名詞句には、このほか、並列および同格の関係によるものがある。同格の名詞句で注意すべきものに、形式類 S+ʔuŋ がある。これは強調表現であるが主語の位置にしか立たない。

e.g. [並列] pui ləvuaʔ kai /ʔε khraʔ sɔʔ lɛic ʔɔh-ʔɛih/ (人・ラワ・もつ・にわとり・水牛・犬・ぶた・何でも) ラワ族はにわとり……その他何でももっている；[同格] kuah /paiʔ kuanndɔuʔ/ ʔoat ʔuŋ (させる・君(たち)・こども・聞く・それ) お前たちこどもに聞かせてやる；/ʔoan ʔuŋ/ sɔp ʔuŋ, /ʔoan ʔuŋ/ sɔp tɜuh ʔuŋ (あるもの・それ・好む・それ・あるもの・それ・好む・ない・それ) あるものは好むがあるものは好まない。

(2) 人称代名詞

i) 基本型

人称代名詞は必ずしも整った体系を示さず、基本型は次の通りである。

1 人称		2 人称		3 人称
単数 ʔaiʔ	複数 ʔeʔ	普通 paiʔ	尊敬 maiʔ	人間 pui (pui tho, etc.) もの ʔuŋ

単数・複数の区別は1人称にしかなく、その他の人称では複数は mu をそえて表現する。mu paiʔ <<君たち>> mu tho <<彼ら>> など。(1人称でも mu ʔeʔ の形もある。)

2人称では、相手が話し手より目下または同等であることを表わすときは paiʔ 目上であることを表わすときは maiʔ を用いる。このほかタイ系借用語の khun <<あなた>>, khu <<先生>> なども用いられる。

3人称として本来の人称代名詞は弱まり型にしか残っておらず、名詞の pui <<人>>, pui tho <<あの人>>, mu hzi <<この人たち>> などを適宜代用する。人間以外のものを表わす代名詞 ʔuŋ <<それ>> は機能が限定されていて、他動表現の目的語の位置に立つか、先行する同格の名詞とともに主語の位置に立つかのどちらかである。

e.g. [目的語] ʔaiʔ sɔp tɜuh /ʔuŋ/ 私はそれを好まない；mah /ʔuŋ/ そうです(それである)；[主語, 他の名語と同格で] /nata ʔuŋ/ maic, maic tɜuh ʔəphaum (顔・それ・よい, よい・ない・心) 顔はきれいが気立てがよくない；etc.

ʔuŋ 以外の基本型の人称代名詞は、文の主語の位置と他動表現の目的語の位置に立ちうる。また前置詞との結合においては次に述べる弱まり型と自由交替的に用いられる。

e.g. [主語] /ʔaiʔ/sam juh ʔuŋ 私がそれをしよう；/pui/ kuat juh keʔ ŋuaʔ khrouʔ

(彼・したい・つくる・彼・家・新しい) 彼は家を新築したがっている; [目的語] pikhrəih tho hlak /pai?/ (娘・あの・愛する・君) あのこは君が好きだ; [前置語付加] sam kuah ʔuŋ la? /mai?~ma?/ それをあなたにあげましょ う; khra k jua? /pai?~pa?/ 君の水牛; etc.

ii) 弱まり型

ラワ語には以上と別に弱まり型人称代名詞とでもよぶべきものがある。

1 人称	2 人称	3 人称	再帰的
ʔa(i)ʔ, teʔ	paʔ, maʔ	keʔ	teʔ

2 人称の paʔ と maʔ の相違は基本型の paiʔ, maiʔ のそれと同じである。また 3 人称 keʔ は人間の場合のみに用いる。これらは、形式類 S の職能のひとつとして、前置詞との結合や名詞句における修飾語の位置に立つことができる。この場合、1 人称はふつう teʔ であるが、これはむしろ《自分》を訳すべきものであって、2・3 人称でもその文の中で paiʔ, maiʔ, pui 等がすでに表わされているときには再帰的に teʔ を用いることができる。

e.g. [前置詞付加] ʔaiʔ kai khra k jua? /teʔ/ soh (私・もっている・水牛・～の・自分・たくさん) 私は自分の水牛をたくさんもっている; ʔaiʔ sam ti ʔəpeʔ laʔ /keʔ/ (私・しよう・買う・上着・～に・彼) 彼に上着を買ってあげよう; pui ti ʔəpeʔ laʔ /teʔ/ 彼は自分のために上着を買った; [修飾語] ʔaiʔ kuat həu nuŋ ʔjuan /teʔ/ 私は自分の村に行き (= 帰り) たい; maiʔ kai maʔ kuan /maʔ/ kuannəuʔ (あなた・もつ・あなた・こども・あなた・いくら) あなたはお子さん何人ですか; paiʔ kuat həu nuŋ ŋuaʔ /teʔ/ ʔa 君は自分の家に帰りたいか; etc.

ところで、自動詞には主語の人称に一致してこの teʔ, paʔ, maʔ, keʔ がしばしば接尾的に付加される。(不定法的に単独で言うときには teʔ を用いる。eg. həu teʔ 《行く》)

eg. ʔaiʔ kuat həu /teʔ/ kurə (私・したい・行く・私・あそこ) 私はあそこに行きたい; paiʔ həu /paʔ/ khuiʔ 君は行った方がよい; pui tah /keʔ/ ʔmea ʔaiʔ (彼・泊まる・彼・と共に・私) 彼は私のところに泊まった; səʔ tho ʔauk × nuŋ ʔjuan-raʔ あの犬はボールワゴンに住んでいる; etc.

他動詞+目的語の形で自動詞になっているものについても同じであるが、この場合、(他動詞+名詞)+teʔ であるとも、他動詞+(名詞+teʔ) 《自分の～を～する》とも考えられる。

eg. khauk na teʔ (洗う・顔・自分) 顔を洗う; jiap ʔneə teʔ (とじる・目・自分) 目をつぶる; etc.

また、他動表現における他動詞や、疑問文の述語動詞においては自動詞・他動詞の区別なしに、この弱まり型人称代名詞が接尾的に付加されることが多い。このとき 1 人称には ʔaʔ~ʔaiʔ が用いられ(ただし多くの場合省略される)、3 人称には keʔ のほかに pui も用いられ

るから、自動詞の場合にくらべればより主語的であるといえる。しかしこの位置に一般の名詞が主語として立つことはなく、また別に主語が表わされる。

eg. [他動表現] ?ai? sam kuah /?ai?/ ?uŋ la? pa? 私はそれを君にあげよう ; mai? lau /ma?/ naŋsu tho khu? (あなた・読む・あなた・本・あれ・する方がよい) あなたはあの本を読むべきだ ; ?i rɔuk /pui~ke?/ ?uŋ hɔu 彼はそれをもって行ってしまった ; [疑問文] ?ai? hɔu /?a?/ kənom 私はどこに行きますか ; pai? ?auk /pa?/ ?juaŋ-ra? ?a (君・住む・君・ボールワン村・か) 君はボールワンに住んでいるのか ; pui ?i hoic sɔum /ke?/ ?a (彼・すでに・終る・食べる・彼・か) 彼はもう食事したか ; sɔ? tho hɔu×kənom あの犬はどこに行くのか ; etc.

なお、再帰的の te? は目的語にも用いられる。eg. ?ai? kuat kuah tɔuh /te?/ ce? (私・したい・させる・ない・自分・ぬれる) 私はぬれたくない (=私は自分をぬれさせたくない)。

その意味で po?-te? <<おたがい>> もこのグループに属するといえる。eg. ?ai? ?mea pai? hlak /po?-te?/ ほくと君は愛し合っている ; etc.

(3) 指示詞その他

本来の指示詞は、近称 hɔi と遠称 tho の2つしかない。しかし、接頭辞 kə- と結合して場所を表わす名詞を作るものはこのほかに発問・不定・汎称などがある。それらは次のような体系を示す。

	近称	遠称	発問	不定	汎称
もの	hɔi	tho	nom	(?ə)?ɔih	?ɔh-?ɔih
場所	kurɔi	kuro	kənom	kə?ɔih	kə?ɔh-kə?ɔih
方向	kəhɔi	kəho			

場所と方向は次の例のように区別される。

e.g. ?ɔiŋ /kəhɔi/ こちらへ来い ; ?ɔiŋ /kurɔi/ ここへ来い ;

hɔu tɔ /kəho/ あっちへ逃げた ; hɔu /kuro/ あそこへ行く。

発問・不定・汎称はそれぞれ nom <<どれか>> (?ə)?ɔih <<どれも(ない)>>, ?ɔh-?ɔih <<どれも>> 等と訳されるものであって、不定は否定文にも用いられる。

e.g. mah /nom/ pi-maic (である・どれ・もの・よい) よいものはどれか (=どれがよいか) ; kai tɔuh /?ə?ɔih/ nuŋ (ある・ない・どれも, 何も・(そこ)に) 何もない ; kuat hɔu /kə?ɔh-kə?ɔih/ どこにでも行きたい ; etc.

被修飾語の位置に立たないこと以外は指示詞は名詞と同じ機能をもつ。指示詞が名詞の修飾語の位置に立つとき、ふつう単位詞を介さずに直接に名詞を限定修飾する。まれに単位詞を伴うことがあるが、その場合数詞と異なって、名詞+単位詞+指示詞の語順となる。

eg. khvak /hɔi/ この水牛 ; pui /tho/ あの人 ; ?əpe? (plah) /nom/ どの上着 ; ?juaŋ

ləvuaʔ (ʔjuan) /hzi/ このラワ族の村 ; etc.

ここで若干の発問詞にふれておく。発問詞 **nom** «どれ», **mam** «何», **pen** «だれ» は基本的には形式類 S に属する代名詞である。しかし、これらは原則として主語の位置に立たず、常に補語 (mah の目的語)¹²⁾ として表わされる。すなわち, **mah nom pi-**~ (である・どれ・もの・~) «~のはどれか», **mah mam pi-**~ «~のは何か», **mah pen pi-**~ «~のはだれか» のような形で表現される。この表現はまたこれらが意味上目的語である場合にも用いられる。

eg. **mah /nom/ pi- raʔ** 大きいのはどれか ; **mah /mam/ pi- kuat paʔ** 君がほしいのは何か ; [目的語] **mah /pen/ pi- juh hzi** これをつくったのは誰か ; etc.

なお、これ以外の発問詞は次の通りで、他の品詞か句に属する。«どこ» **kənom**, «いくら» **kuanndouʔ** [数詞], **muʔ mam**, **muən mam**, «いつ» **ŋam mam**, «どのように» **ʔjan mam**, «なぜ» **juh mam** etc.

(4) 数 詞

基本的な数詞は次の通り。

«1» **teʔ~tiʔ** «2» **ləʔa** «3» **ləʔoi** «4» **paun** «5» **phoan**
 «6» **ləh** «7» **ʔa-ləh** «8» **sətaiʔ** «9» **sətaiñ** «10» **koa**

このうち«1» **tiʔ** は単位詞との結合においてのみ現われ、その他では **teʔ** である。

11~19は«10プラスx»の形で表現されるが、«12»«13»«18»«19»以外に **lə-** が挿入される。

«11» **koa-ləteʔ** «12» **koa-ləʔa** «13» **koa-ləʔoi** «14» **koa-ləpaun** ……
 …………… «17» **koa-ləʔa-ləh** «18» **koa-sətaiʔ** «19» **koa-sətaiñ**

20以上の10位の数は上の1位の数詞と形のうえで関連をもっている。

«20» **ʔŋa** «30» **ʔŋoi** «40» **ləpaun** «50» **ləhoan**
 «60» **ləŋləh** «70» **ʔa-ŋləh** «80» **lətaiʔ** «90» **lətaiñ**

なお、«100» **ʔəjuah** «1,000» **puən** «10,000» **hməun**.

長い数表現には適宜 **ʔmea**, **pai** が挿入される。

e.g. «873» **sətaiʔ ʔəjuah (ʔmea) ʔa-ŋləh (pai) ləʔoi**

また、疑問を表わす数詞は **kuanndouʔ** «いくつ», 不定は **ʔoan** «いくつか, ある~» である。e.g. **kuanndouʔ ʔbəu** 何個? ; **ʔoan ʔmat** 何パーツか。

数詞は名詞を限定修飾することができるが、限定される名詞が単位詞であるとき、数詞+単位詞の構造をとる。この構造自体が名詞句として主語や目的語の位置に立ちうる。

e.g. /ləʔa ʔbəu/ **ʔi se** 2個がくさっている [主語] ; **ʔaiʔ kuat /tiʔ plah/ ʔnoŋ** 私はただ

(12) 2. 3. (2) 参照。

1 着ほしい [目的語] ; ?ŋa nɜum 20年 ; ?əjuah ?mat 100パーツ ; etc.

単位詞以外の名詞を，単位詞を介して計量する場合は，名詞+数詞+単位詞の構造をとる。しかし単位詞は必ずしも必要とせず，ふつうは名詞+数詞の形である。実際，ラワ語の大部分の名詞はタイ語などの類別詞のように特定の単位詞をもたない。

e.g. pɛ lə?oi ~ pɛ lə?oi ?bɜu マンゴー 3 個 ; pui lə?a ~ pui lə?a pui 2 人 ; sɔ? paun 犬 4 匹 ; etc.

ただし，pui 《人》や hla? 《葉》のように名詞と単位詞が同一である場合，1 のときは，数詞 (ti?) + 単位詞，それ以外のとき名詞+数詞のタイプが多いようである。eg. ti? pui 1 人 ; pui leh 6 人 ; ti? hla? 1 枚 ; hla? lə?a 2 枚 ; etc.

ところで，数詞+単位詞は数詞句として数詞と同様に，動詞を修飾することもできる。次のような例では明らかである。

eg. kui hɜu te? /ti? cuan/ (経験がある・行く・私・1・回) 私は1度行ったことがある ; mɔ hɜi hloan /ti? puan met/ (山・これ・高い・1・1,000・メートル) この山は高さ1,000メートルだ ; ?auk /ti? pui/ 1人で住む ; etc.

次の例のような場合には，他動詞+目的語という動詞句を数詞(句)が限定している構造と考えることができる。

eg. ti ?au /lə?a ?bɜu/ (買う・みかん・2・個) みかんを2つ買う ; pui tho kai kuan /lə?oi/ (人・あれ・もつ・子ども・3) あの子は子どもが3人ある ; etc.

もちろん，これらは他動詞+(名詞+数詞(句))と分析してもよいわけであるが，名詞と数詞の間に他の動詞修飾語が入ることがあるので上のように解釈しておいた。¹³⁾ すなわち，

<p>sətu? rɜuk sɔ? ?mea te? te?</p>	<p>(坊主・連れてくる・犬・～と共に・自分・1) 坊さんが犬を1匹つれてきた。</p>
------------------------------------	--

2.3. 形式類 V — 動詞および動詞句

形式類 V は，それ自体でもしくは目的語を伴って述語の位置に立ちうる形式である。そのほか，名詞など形式類 S を限定修飾することもできることは名詞句の項で述べた。

e.g. [述語] ?ai? /kuat ?aic/ (私・したい・寝る) 私はねむたい ; /hlai?/ 雨が降っている ; /mah mam/ pi- poan ma? (である・何・もの・食べる・あなた) あなたの食べたものは何ですか (=何を食べましたか) ; [修飾語] ?ai? sɔp kuanndou? /tia?/ 私は小さい子どもが好きだ ; pui /thou? khua/ ものを売る人 ; ñam /hlai?/ 雨の降る時 (=雨季) ; etc.

(13) たとえば日本語においても，「2つのみかんを買う」「1匹の犬をつれてくる」よりも「みかんを2つ買う」「犬を1匹つれてくる」の方が普通の表現である。

単語としての形式類Vは動詞であって、自動詞・他動詞・形容詞・無人称動詞などがある。

(1) 自動詞

目的語をとらずに述語となりえて、人称を表わす *te?* ; *pa?,ma?* ; *ke?* が付加される。不定法的に用いる場合ふつう *te?* を伴う。このグループに属する単語は数多い。

e.g. *hzu te?* 行く ; *?ziñ te?* 来る ; *spum te?* 食事する ; *?aic te?* 寝る ; *ñwah te?* 笑う ; etc.

pikhrəih tho /juam ke?/ ti? pui (少女・あれ・泣く・彼女・1・人) あの子はひとりで泣いている ; *pai? /?ziñ pa?/ mua mam* 君はいつ来たのか ; etc.

(2) 他動詞

目的語と結合して他動表現の句を構成しうるもので、不定法的には *?uŋ* «それ»を伴って表わされる。このグループも数多い。

e.g. *poan ?uŋ* 食べる ; *kuah ?uŋ* 与える ; *jo? ?uŋ* 見る ; *tsum ?uŋ* 煮る ; *thou? ?uŋ* 売る ; etc.

他動表現は、他動詞+目的語の構造で表わされるが、後置助動詞や人称を表わす *?a(i)?* ; *pa?*, *ma?* ; *ke?* は目的語より前に他動詞に付加される。

e.g. *?ai? /?ətouh ?a? pui/* (私・会う・私・人) 私は人に会った ; */joŋ tʰuh pa? ?uŋ/?a* (わかる・ない・君・それ・か) 君はそれがわからないのか ; etc.

目的語の位置には、ふつう、名詞・指示詞・人称代名詞 (*?uŋ*, *te?*, *pa?*, ..., *po?-te?* なども含めて)・数詞・名詞句などの形式類Sが立つが、ときには形式類Vが立つこともある。

e.g. [S] *juh /kan/* 仕事をする ; *(?ai?) pə mai? coi/te?/* (私・願う・あなた・助ける・自分) どうか私を助けて下さい ; *pui sɔp tʰuh (ke?) /mɔup mbran/* (彼・好む・ない・彼・牛・ビルマ人) 彼はビルマ人の牛がきらいだ ; [V] *?ai? kuat /spum (te?)/* 私は食べたい (=腹がへった) ; *mai? sətək ma? /?ah khrəuŋ ləvua?/ la? ?ai?* (あなた・教える・あなた・話す・ことば・ラワ・～に・私) あなたは私にラワ語を話すことを教える。

いわゆる連結詞 (copula) の *mah* «である»も職能のうえで他動詞に属する。*mah*+目的語の構造をとるからである。ただ、*mah* の場合は目的語の位置に文が立つことがある。

e.g. *həi /mah ?əmɔih/ ?a* (これ・である・バナナ・か) これはバナナですか ; */mah ?uŋ/* そうです ; *?aup/mah pui hzu ?ia ke?/ ?a* (か・である・彼・行く・散歩する・彼・か) 彼は散歩に行くのですか ; etc.

他動表現の特殊なものとして使役表現がある。これは、使役動詞+目的語+動詞(句)の形で表現される。使役動詞は、*kuah* «させる», *pə* «願う», *sətək* «教える»などのほかは余りない。

e.g. (?ai?)/pɔ mai? ?ah koi koi/ (私・頼む・あなた・話す・ゆっくり・ゆっくり) どうかゆっくり言って下さい ; ?ai? kuat /kuah tɔuh te? ce?/ (私・したい・させる・ない・自分・ぬれる) 私はぬれたくない (=自分をぬらしたくない)。

これに対する受動表現はラワ語では余り一般的な表現でないようであるが、形としては *lok* + 目的語 + 他動詞の構造をとる。

e.g. *pui sam /lok ke? tamnuat hmɔuk/, sup ?juɑ-fin* (彼・だろう・当たる・彼・警察・捕える・吸う・アヘン) 彼はアヘンを吸ったから警察に捕まるだろう。

(3) 形容詞・無人称動詞

ラワ語は音節構成要素としてのトネームをもたないが、一種の文法的要素としての上昇型トーンがあって、形容詞と無人称動詞のみに伴って現われる。

e.g. *tia?* ↗ <小さい> *phuah* ↗ <明かるい> ; *hlai?* ↗ <雨が降る> cf. *hlai?* ↘ <雨> (名詞)

i) 形容詞

形容詞は無人称動詞とちがって主語に対する述語になりうるが、弱まり型人称代名詞が付属することはない。

e.g. *pikhrɔih thɔ /maic/ loan* あの娘はとても美しい ; *səkeap juɑ? ma? ?aup /?dan/ ?a* (火ばし・～の・あなた・か・長い・か) あなたの火ばしは長いですか ; etc.

形容詞の比較は、*lua* または *phrah* <よりも> を介して表わされる。最上級は *lua pui*, *phrah pui* <ひとより, ほかより> で表現される。

e.g. *hɔi /maic lua thɔ/* これはあれよりよい ; *?ai? ?ah tɔu? lɔic /ñum phrah tɔu? ka?/* (私・思う, いう・肉・ぶた・うまい・より・肉・魚) 私はぶたの方が魚よりおいしいと思う ; *?juɑŋ ləvua? pi- /ra? phrah pui/ mah ?juɑŋ-ra?* (村・ラワ・もの・大きい・より・他・である・ボールワン) ラワの村で最も大きいのはボールワンです ; etc.

形容詞が他の動詞と同様に名詞など形式類 S を限定修飾することは前述の通りだが、このほかにときに他の形式類 V をいわば副詞的に限定することがある。

e.g. *pui hɔu ke? /klaic klaic/* (彼・歩く・彼・はやい・はやい) 彼ははやく歩く ; *kuan-ndbu? hɔi juh ?bh-?zih /maic/* (こども・これ・する・何でも・よい) この子は何でも上手だ ; etc.

ii) 無人称動詞

無人称動詞は主語をとることがない。意味的には天候や時間に関するものが多いが、形容詞と同様に上昇型トーンをとる。

?i /mbrɔum/ もう正午だ ; *?aup ?i /hoic/ ?a* (か・もう・終る・か) もう終わったか ; *pun hɔu tɔuh, /hlai?/ la?* (できる・行く・ない・雨が降る・(われわれ)に対して) 雨が降ってい

るから行けません；

(4) 動詞句について

動詞句は核となる動詞に種々の形式が付加結合して構成されるが、大ざっぱに言ってそれには一定の順序がある。以下、その順序に従って述べて行く。

i) 動詞の並列

これは動詞句の並列とは別に、これ自体が核となって次の後置助動詞や人称代名詞と結合する形式である。

e.g. ?aiñ ?auk 来て住む；/hzu ?ia/ te? 遊びに行く；/sɔum len/ te?, ?i sak te? (食べる・遊ぶ・私・もう・満足する・私) オヤツを食べて満腹した；/rɔih ?eah/ ?uŋ (選ぶ・取る・それ) 好きなのを取れ；etc.

ii) 後置助動詞付加

後置助動詞の例は後で挙げるが、後置助動詞付加の形式と限定関係の形式とは te? 等の位置で区別される。

eg. ?ai sam hzu /lɔuh/ te? 私もいっしょに行こう [後置助動詞]；

?ai? sam hzu te? /klaic/ 私は速く行こう (歩こう) [修飾語]

?ai? sam hzu/lɔuh/te? /klaic/ 私もいっしょに速く歩こう。

iii) 人称代名詞付加

自動詞と他動詞には弱まり型の人称代名詞が付加されるが、これについてはすでに述べたから省略する。

iv) 他動表現

他動詞 (使役動詞・連結詞 mah も含めて) は目的語をとって他動表現の形式をつくるが、これもすでに述べた。

v) 限定修飾

以上 i) から iv) までの形式はすべて、被修飾語+修飾語の構造における被修飾語の位置に立ちうる。修飾語の位置には、前置詞・接続詞に導かれた形式、場所・時間を表わす名詞(句)、副詞的に用いられた形容詞などのほか、数詞(句)が立つ。

e.g. [前置詞付加句] mai? ?aiñ ma? /nɔum kənom/ あなたはどこから来ましたか；[接続詞付加句] sam hzu tɔuh te? /nda pui hzu/ もし彼が行くなら私は行かない；[名詞] hzu ma? /kənom/ どこに行きますか (=こんにちわ)；[形容詞] pi?əpɔuŋ juh pipoan /ñum/ (女・つくる・食物・おいしい) 女性は食物をうまくつくる；[数詞] ?juan hzi kai ñua? /kuannɔu? (lan)/ (村・これ・もつ・家・いくつ・軒) この村には家は何軒ありますか；etc.

vi) 助動詞付加

助動詞は以上の動詞・動詞句の直前に位置する。助動詞の例は後で挙げる。

e.g. /ʔi/ hoic もう終わった；/tiʔ/ ʔaiñ tɔuh keʔ 彼はまだ来ていない；etc.

vii) 動詞句の並列

最後に、動詞句の並列がある。意味的には修飾関係の場合も多いが構造の上の相違がないのでこれに含めておく。

e.g. joʔ ʔuŋ hmoŋ ʔuŋ 見たり聞いたりする；ʔaiʔ hɔu teʔ nean cuk juaʔ teʔ (私・行く・私・見る・田・～の・自分) 私は自分の田を見に行った；etc.

2.4. 種々の附属語

(1) 前置詞

しばしば用いられる前置詞には次のようなものがある。e.g. nuŋ <<～において>>, laʔ <<～に対して, ～のために>>, nɔum <<～から>>, ʔmea <<～と共に, といっしょに>> tua <<～を用いて>>, juaʔ <<～の所有になる>>, ʔjaŋ <<～のような, に>>, lua, phrah <<～よりも>>, etc.

これらの前置詞は、形式類Sを導いて、他の形式類Sや形式類Vの限定修飾語を構成する。

e.g. ʔəpeʔ /laʔ/ piʔəpɔuŋ 女性用の上着；si /ʔjaŋ/ hɔi これと同じ色；toaŋ kuaŋ /tua/ heauʔ (捕える・ねずみ・で・わな) わなでねずみを捕える；kai ʔəvia /nuŋ/ piʔdoak (もつ・とら・に・森) 森にはとらがいる；etc.

ときには、前置詞だけで形式類Vの修飾語の位置に立つことがある。この点でこれらのグループを前置詞とよぶのには検討の余地があると思うが、いちおう、teʔ <<自分>> や ʔuŋ <<それ>> が省略されたものと理解しておきたい。

e.g. ʔaup sam rɔuk kuan maʔ /ʔmea/ (teʔ) ʔa (か・しよう・連れて行く・こども・あなた・と・(自分)・か) お子さんを連れて行くのですか；hlat, kai ʔəvia/nuŋ/ (ʔuŋ) (こわい・ある・とら・に・(それ)) こわい！とらがいる；ʔaiʔ kai khraŋ /juaʔ/ (teʔ) soh (私・水牛・の・(自分)・たくさん) 私は水牛をたくさんもっている；etc.

(2) 接続詞

私の得た資料では接続詞はあまり多くなく、次のものがあるだけである。

eg. nda <<もしも～>>, ʔmea <<そして；であるが>>, paŋ, paŋ-mah <<たとい>>, tho <<～の理由は>>

これらは、文を導いて形式類Vまたは他の文を修飾することができる。文修飾の場合は修飾語が被修飾語に先行することもある。

e.g. /nda (hɔi) ʔi se/ sam ʔeah tɔuh ʔuŋ (もし・これ・もう・くさる・しよう・取る・ない・それ) もし (これが) くさっているのなら, いらぬ；nata ʔuŋ maic /ʔmea ʔu maic ʔəphaum/ (顔・それ・よい・であるが・ない・よい・心) 気立てはよくないが顔はきれい；/paŋ-mah maiʔ ʔu hɔu/ ʔaiʔ sam hɔu teʔ たといあなたが行かなくても私は行く；

/tho pui hzu tzu/ hlai? la? 彼がいかなかったのは雨降りだったからだ ; etc.

?mea は上例のように、それが導く形式を受けて《～であるが》の意味に用いられるほか、並列的に2つの形式を結合することもできる。(e.g. ?ai? ?mea pai? ぼくと君 ; ru? ?mea ?duŋ 大きくて長い ; etc.) また前置詞としても用いられる。

tho はいちおう理由の接続詞としておくが、上例のように、これが導く形式によって修飾される方の形式が前者の理由を表わしているところから、もともとは tho (pui hzu tzu) mah (hlai? la?) 《(彼が行かなかった) のは (雨降りだったから) である》のように名詞節を導くものであったと考えられる。

(3) 助動詞・後置助動詞

助動詞は形式類Vに先行し、後置助動詞は動詞に直接に後置されるが、意味的には互に近いものがある。

助動詞には次のようなものがある。

e.g. ?i 《すでに～した》, sam 《～しよう, だろう》 ti? 《まだ》 ?aup 《いたい》
?u, ?u-ca?, ca? 《～しない》

?i は完了態, sam は未来を表わし, ti? は未完了で否定文のみに用いられる。?aup は一般に疑問を表わす。?i, sam, ?aup が同時に現われるときは、前から /?aup ?i sam/ の順序となる。

e.g. /?i/ səŋgai? もうおそくなった ; /sam/ ?ziñ ti?-tai? やがて来るだろう ; /ti?/ hoic tzu まだ終わっていない ; /?aup/ mah hzi ?a これですか ; /?aup ?i sam/ hoic ?a もう終わるところですか ; etc.

?u, ?u-ca?, ca? は後置助動詞の tzu と同じく否定を表わすが、命令(禁止)文および接続詞に導かれた文(いわゆる従属節)の中でしか用いられない。

e.g. /ca?/ hzu 行くな ; nda pai? /?u-ca?/ kuah ?uŋ la? ?ai?, sam ?ziñ te? もし君がそれを僕にしてくれないのなら僕は帰る ; etc.

後置助動詞には次のものがある。

e.g. loan 《非常に～》, ?dan 《まだ, さらに～》, luh 《～もまた》 tzu 《～しない》
peh 《～せよ》

loan は形容詞のみと結合する。?dan は、前に述べた助動詞 ti? が否定文のみに用いられるのに対し、肯定文のみに用いられる。loan, luh, tzu が同時に用いられるときは、前から /loan luh tzu/ の順序となる。peh は命令文に用いられる。

e.g. kurzi fiak /loan/ ここはとても暗い ; pui mah /?dan/ ke? piplia (彼・である・まだ・彼・若者) 彼はまだ若い ; mai? sɔum /luh/ ma? ?a あなたも食事しませんか ; sɔum /tzu/ te? 食べません ; tho maic /loan luh tzu/ あれもまたそんなに美しくない ; khauk

/peh/ na pa? 顔を洗え!

(4) 文 末 詞

文末のみに立つもので、すべて疑問の意味を表わす。eg. ?a <<~か>>, tau? <<~ではないか>> ?əjɔŋ <<~か>>

このうち、?a と tau? とは発問詞をもたない文（助動詞 ?aup はあってもなくてもよい）の終末に位置して疑問文を構成する。?əjɔŋ は ?aup と同様に発問詞のあるなしにかかわらず疑問文をつくる。

e.g. maic /?a/ きれいか; ?aup sam hɜu ?ia ke? /tau?/ 彼は遊びに行くのだろう、ちがうかい; ?ɔk pa? nɜum kənom /?əjɔŋ/ いったいどこから出てきたのだ; etc.

2.5. 文

最後に、文の主語・述語、文修飾および命令文や間投文などについてまとめておきたい。

(1) 主語と述語

文の主語には形式類 S が、述語には形式類 V が立つ。文を主語と述語に分析すると、次の3つのタイプに分けられる。

i) 主語+述語

e.g. hɜi mah saŋ これが象だ; khɾak juwa? ?ai? kai rian mu? pi- juwa? mai? 私の水牛はあなたと同じほど力がある; etc.

ii) 述語+主語

あまり多くはないが、mah+発問詞が述語である場合にこのタイプをとることが多い。

e.g. mah mam hɜi これは何であるか; mah pen pi- sam hɜu 誰が行くか（行くのは誰か）; etc.

iii) 述語のみ

これは i) ii) の主語が省略されたものと、無人称動詞が述語動詞であるものがある。

e.g. hɜu kənom どこへ行く?; mah mam 何だ; ?i mbrɜum 正午になった; etc.

(2) 文修飾と文の並列

文修飾にも、文（被修飾語）+修飾語と、修飾語+文の2つのタイプが考えられるが、前者は述語（形式類 V）の修飾と形式のうえで区別がつかない。文を修飾限定する形式は、時間・場所を表わす名詞、前置詞・接続詞に導かれた形式などである。

e.g. ?ai? sam hɜu /sə?ɜih/ 明日は私は行きません; /kuro/ mah mam pi- kai nuŋ あそこには何がありますか; /paŋ-mah hlai?/ sam hɜu te? 雨が降っても私は行こう; etc.

ふつうの文の並列については問題がないから省略するが、注意すべきものは一方が無人称動詞による文の場合である。次の例のように、意味的には主語述語の関係（先行する文が主語）

ないしは結果を表わす接続関係であることが多い。

e.g. *ʔeʔ hɜu cuaŋ teʔ, ʔi ʔdɜiŋ* 私たちは歩いて、ながい間になる (=ながい間歩いた);
cea mau, ʔi ʔɜuk 金を使って、全部すんだ (=金を使い果たした); *juh paʔ kan, ʔi hoic*
ʔa 君は仕事をして、終わったのか (=仕事はすんだか); etc.

(3) 命令文その他

命令文の動詞は後置助動詞 *peh* を、否定の命令文(禁止文)には助動詞 *ʔu,caʔ, ʔu-caʔ* を伴なう。*peh* はなくてもよい。命令文はふつう主語がなく、また他動表現における目的語も省略されうる。

e.g. *hɜu ʔəsaic peh taiʔ paʔ* 手を洗って来い; *caʔ juam* 泣くな; *ʔeah ʔeah* 取れ取れ
 (どうぞどうぞ);

感嘆文はいっそう不完全な断片的文であって、感嘆詞や名詞(句)だけのものが多い。

e.g. *ʔolah, ʔi jum* ああ、死んでしまった; *ʔəham* 何だって! ; *ʔu* ウン(返答); *kuan-ndbuʔ tiaʔ kuanndbuʔ tiaʔ* ころころ(坊や坊や); etc.